

13

『耆婆五臓経』の編纂者と立川流との関係

範 駿

高野山大学大学院 文学研究科 博士後期課程

『耆婆五臓経』は14世紀頃の日本で成立したとされている。その原本は現存していないが、①天保四年(1833)、②天保七年(1837)の彩色写本があり、それぞれ台湾国立故宫博物院と国立公文書館内閣文庫に所蔵されている。本書の構成は、中国医学による鍼灸・経穴の内容が全体の6割を占め、残る4割は五行・五臓・伝屍病に関する医説と、仏教や道教に関係する五臓六腑・三尸九虫・三魂七魄の図説である。なお、本書の編纂者については、杜正勝氏は、唐や宋の人がインドの医神の名を借りて作った偽作ではないかと考えている。真柳誠氏は故宮蔵本の書誌的な研究を行っており、その編纂者を「(日本)不著撰人」と考えている。一方、二写本の一葉裏に書かれている奈須柳邨(1774-1841年)の書誌的考察がある。本書の編纂者は足利時代(1394-1569年)の密教僧と想定されている。拙論では、『耆婆五臓経』に見られる、①立川流の思想要素と②「伝屍二十五病録」の出典という2点から、本書の編纂者の身分をより明確してみたい。

まず、本書に掲載されている「五輪男女対向之図」は立川流の思想の一端を示している。「五輪男女対向之図」は両界曼荼羅をそれぞれ男・女と配するほか、左右対称の五色阿字を配し男・女と結び付けている。つまり、両界曼荼羅のうち、金剛界曼荼羅に男性、胎藏界曼荼羅に女性を配し、男女の交合をもって、「煩惱即菩提」「即身成仏」が可能であるとした。このような考え方は恵海『破邪顕正集』(1281)、有快『宝鏡鈔』(1375)などの書で批判され邪教とされている。その後、立川流は次第に衰退し、江戸時代中期に消滅した。

また、『耆婆五臓経』の「伝屍二十五病録」という見出しの下には、二十五種の伝屍病とその灸治・薬治・食治を述べている。類似する内容は光宗編『溪嵐拾葉集』、我宝編『伝屍病廿五方』にも見えている。しかし、内容の比較を行うと「伝屍二十五病録」が『溪嵐拾葉集』『伝屍病廿五方』と同系の資料に由来する口伝に基づくと考えられる。一方、『伝屍病廿五方』(1334年)には、二十五種の伝屍病の由来について、それは日本で流通しなかった秘密のもので、中国から伝来したものの、日本の医師は知り難かったと言う。しかし、拙論の考察によって、二十五種の伝屍病は中国から伝来したものでなく、日本で成立した「五種天魔鬼」の概念に由来しており、澄豪(1259-1350年、天台宗・山門派・穴太流の法脈を継ぐ人物)によって発展されてきたのである。さらに、二十五種の伝屍病を治す、いわゆる「伝屍廿五方」は天台密教系に伝えられており、世の中に流布されなかったと推測される。従って、我宝は中国から伝来したものとみなした。以上により、『耆婆五臓経』の編纂者は元々立川流の門人であったが、立川流が14世紀後半に衰退に向かったので、別の道を模索するために天台宗の門人となった可能性が高い。

最後に、『耆婆五臓経』の読解を踏まえ、本書の特徴は下のようにまとめられる。即ち、①編纂者の署名がない、②立川流の思想的要素が見える、③道教の病因論・身体観が取り入れられている、④鍼灸と五臓論を基調とする。これらの特徴を持つ書物は『耆婆五臓経』だけでなく、真柳誠氏の『日本の医薬・博物著述年表』に沢山見えている。それらの成立年代と編纂者などの情報は不明な場合が多いが、一般には室町時代の産物と考えられる。これらは立川流の門人が流派の力の衰退とともに、医書を編纂しながら、僧医への転身を求めようとしたことを示しているのではないかと考えられる。